

稲田耕三

① 高校 放浪記

《先生は敵、親父は鬼篇》

先生は敵、親父は鬼——
無頼の、しかし懸命な
高校放浪生活を記して
若い人たちに
圧倒的共感を呼んでいる
話題のベストセラー!!
(続篇も好評発売中)

サイマル出版会

稲田耕三

① 高校 放浪記

《先生は敵、親父は鬼篇》

サイマル出版会

サイマル出版会のめざすもの

サイマル出版会は、激動する現代史の創造に読者とともに参加する姿勢で、国際的言論活動を展開するべく出発した。思えば、人類は平和のために戦争を続け、世界は一つであることを願いながら分裂し続けてきた。科学の発展は、電子情報時代をもたらしたが、情報の同時性は、また単純同一反応性をも生み、新たな誤解に苦悩する結果となつてゐる。われわれは、こうした新たな誤解による相剋の根をとり除くために、また世界の指導国家として再登場した日本が国際的資質を豊かにし、国内の諸課題を鋭角的にとらえ、国際間の理解を深めるための現実的歴史的素材を提供し、国際的志士ニケーションを円滑にすることによって、条件を回復し、世界が平和と繁栄を営み、言論活動が盛んになることを願ふ。寄与しようとする事業に、言論活動の中心となるべきやかながらも高き理想に情熱をこめて、賢のご支援を期待してやまない。

(サイマルの本の版権記号は群衆にあります)

(著者紹介)

稲田 耕三
いなだ こうぞう

1949年、三人兄弟の三男として三重県に生まれる。父は中学校教員。64年三重県立木本高校に入学、65年に同校を中退してから、鳥取県立米子東高校中退、和歌山県立星林高校中退、久保田鉄工退社、ニチボー宮川退社、三重県立宮川高校萩原分校中退後、70年に和歌山県立新宮高校を卒業。69年に結婚し、現在三兄の父となり、進学塾を開きながら大学入学のために勉強中である。

現住所・三重県員弁郡東員町大木町営住宅1-21

高校生活と青春——読者のみなさんへ

ある日、当社編集部に、ぎっしりと書きこまれた上・下二冊のノートが送られてきた。それは、人びとを動転させた連合赤軍事件がおこる少し前のことであった。(上)と記されたノートの表紙には、こう書かれていた。

*

人は私をバカだというかも知れません。またよく立ち直ったという人もいるかも知れません。しかし私が書きつづったのは、そんな評価をのぞんではないのです。

義務教育最後の中学時代から、私はあらゆることに反抗しました。でも身にしてみても感じたのは高校に入学してからです。教育とは何なのでしょう。私は県立高校を五校も転々としました。しかし今でもわかりません。私は自分の半生のうちで、両親や兄弟達の強い愛情を知らされました。父とは仇どうしのようにいがみあいましたが、結局は父に負けました。

私は数年前、ある高校雑誌に自分のことを書いてみたことがありました。小さな意見としてのせてもらったのです。ところが予期しなかった手紙を、全国から何百通ともらったのです。私はそれには返事を書きませんでした。返事を書くのがたいへんだというような

単純な理由でなく、私を理解していないラブレターまがいの手紙が大部分だったからです。しかし私は高校とはどういうものかを言いたいのです。私は不良といわれる人間を知りつくしました。私がたどった道、そう、

三重県立木本高校中退、鳥取県立米子東高校中退、和歌山県立星林高校中退、久保田鉄工退社、ニチボー宮川退社、三重県立宮川高校分校中退、和歌山県立新宮高校卒業。

ここで私の体験のみを述べてみましょう。ただ人の名だけは実名と仮名を混せて使っています。

一卷は木本高校退学までの不良生活。

二巻は米子・和歌山まで。

三巻は大阪・宮川まで。

四巻は宮川・新宮高校まで。

三重県員弁郡東員町大木町営住宅一ノ二一 稲田耕三

*

和鳥賢三のペンネームで書き送ってきたノートを読みながら、私たちはなぜか心を動かされた。そこには大学受験に明けくれ、四無主義（無気力、無関心、無責任、無感動）につかっているといわれる昨今の高校生たちをとりまく精神生活のある断面が露出していたように思えたからである。「青春」と呼ぶにはあまりにもずさんだ反抗と、不安にさいなまれた心の孤独があった。教師を敵と思い、父を鬼とするその惨なるまでの敵意にみちた悲しさ。先生とは何か。教育とは、高校生活とは、親とは——と問い続ける稲田君をとり

囲む不信の環境と荒れた高校生活。

私たちは、彼の乱暴で粗野で、むきだしの反抗心が周囲のものを傷つけると同時に、自らの心をも傷つけてゆく高校放浪生活を赤裸々に記したこの二冊のノートのなかに、いまだそれぞれの青春を生きている若ものたちの姿を見たのであった。

このノートは、荒々しいなかに切ない優しさを秘めた、ある青春の記録である。価値観が激変し、社会の、世代の亀裂が癒しようのないほど拡大しつづけ、なによりも教育のあり方と青春の意味が問われているこの時代。それを生きる感受性ゆたかな若ものたちを理解する一つの手がかりとして、親と教師、広く青年たちの行動を無謀ととがめ、その行動を否定する世の人びとに、私たちは一つの素材としておくりたいと出版を決断したのである。さらには、なによりも同世代の諸君のために。

ノートは和鳥賢三というペンネームで書かれていたが、出版にあたっては、稲田君との話し合いで、本人の社会的責任を明確にするうえから本名に戻し、関係者はほとんど仮名とした。見出しは編集部でつけたものである。

稲田君は新宮高校を卒業する前、六九年に結婚し、七〇年の安保闘争と学園紛争には、医大生の兄とともに東京で新左翼に加わって闘争に参加した。現在は二児の父で、大学へ行くために、学習塾を開きながら勉強している。

(一九七二年四月)

サイマル出版会編集部

高校放浪記① 目次

高校生活と青春……………（編集部）

——読者のみなさんへ

第一部 俺にだって夢がある

1	泥をかぶったプライド……………	三
2	先生は敵や……………	一九
3	何でそれが悪い……………	三四
4	木竜会会則第一条……………	四七
5	親父は鬼や……………	五五
6	停学処分になされて……………	六四
7	家 出……………	六七
8	恋を碎いて……………	七

第二部 放浪の門

1	海に沈んだ太陽……………	一〇五
2	俺の不良はしれている……………	一一〇
3	心の中のサムライ……………	一一〇
4	無期停学……………	一二四
5	卑怯者……………	一五八
6	せつない友情……………	一七三
7	思ったように生きてやる……………	一八五
8	涙がかけるとき……………	一九五
9	退学か放校か……………	二〇四
10	あてどない旅立ち……………	二〇八

(以下続刊)

はじめての読者のために

(編集部)

第三部 俺が狂つとるんやろか

- 1 米子東高の春は冷たかった
- 2 年下の上級生
- 3 人間の幸せてなんだ
- 4 異性がほしい
- 5 やめられないタバコ
- 6 ティーチングマシン
- 7 異性不純交遊
- 8 狂ってるのはどっちや

第四部 なんのための高校生生活

- 1 やっぱ俺は甘えん坊
- 2 女ってなんや
- 3 心の傷
- 4 浜辺の野宿
- 5 木高三勇士再会
- 6 気ままな生活
- 7 再び退学を覚悟して
- 8 「人間は一人なんやよ」
- 9 星林高校の二日目
- 10 後悔なんかするもんか

第三卷から読む諸君のために（編集部）

第五部

どうして俺を生んだんや

第六部

虫ケラになってたまるか

1 女を知ったあとで

1 母のうしろ姿

2 溶鉄が夢を砕く

2 ニチボー宮川男寄四号

3 とうとう親父を殴った

3 病みはじめた身体

4 母ちゃんにも見捨てられ

4 気になる学歴

5 明日が見えない

5 一人ぼっちの入院

6 「耕三、死ぬのがこわいんか」

6 いばるな大卒野郎

7 女のアパート

7 拒絶する高校の門

8 まだ定時制がある

8 宮川高校編入生となる

読者の青春と重なりあつて

(編集部)

第七部 嵐の最前線

- 1 屈辱をこらえて
- 2 ラグビーに灼きつくせ
- 3 異常なセックス
- 4 「ここは地獄や」
- 5 白紙の答案
- 6 学生運動に突撃
- 7 割れた赤ヘル
- 8 台風のなかをつつ走れ
- 9 学生服事件

第八部 常識なんかくそくらえ

- 1 犬死はごめんだ
- 2 全国の高校生諸君！
- 3 あいつは俺の女房になる
- 4 焦燥
- 5 この愛にかける
- 6 退学勧告のなかの反問
- 7 新宮高校生梅田耕三
- 8 同棲生活
- 9 二人できずくバリケード
- 10 母が手にした卒業証書

第一部

俺にだって夢がある

1 泥をかぶったプライド

私は三重県の南端、御浜町阿田和^{みはまろうあたわ}というところで育ちました。父は中学の教員、私はその父の三人兄弟の末っ子として生まれました。

小学高学年になるまで、私は何の不自由もなく育ちました。私という男は、他人から見れば家が金持ちでないくらいが不服とぐらいにうつただけかもしれません。しかし、ちょっと深く私の家をのぞいてみたら、私と父が仇どうしでいつも、もめ事を起こしているのにおどろいたでしょうが。

くもり空から、今にもなみだが落ちそうな入学式でした。

私が入学した三重県立本^{きんもと}本高校（熊野市）とは、付近の中学校約十校ぐらいから生徒が集まり、普通科五組、商業科二組、家庭科二組の計九組で一学年が構成されている三流高校です。進学率はまあまあですが、リンチの多いことといったら、どこにでもあるティノウ高校のカンパンを校門にさげているようなものでした。

私は一年一組の二番。担任というのが、大学出のホヤホヤで数学を受け持つことになったのです。メガネをかけた不細工な顔をくっつけた虫の好かない男でした。

私の木高時代のなかで大きな位置にすわり込んだ男。この男、名は古味利成。一八〇センチをこえる上背で、童顔の丸い顔をしていました。この男の得意科目は国語でした。この男とは、身体検査の時に体重をはからずに他の所ばかりまわったのがエンで、親友となつたのです。

教室に入ると五十二人の顔をずうっとみわたして、『この男は』と思った男が一人いたのです。年は私達と同じとはとても言えたものでないフケタ顔をしており、担任が室谷喜八郎と呼んだ時、クラスの者一同ドッと笑いました。顔と古風な名があまりにもピッタリだったからです。

この日は便所、理科室、職員室など高校内を見学した後、そうじの人数をきめる時に、私は「五人」と叫びました。すると喜八が「三人」と叫び返してくるのです。「五人」「三人」「五人」「三人」と交互に言い合った末、五人と決まりはしましたが、私はこの喜八に対して虫の好かないものを感じたのです。私は、この日家に帰るなり、駅弁大学の一つに入学しその準備におおわらわの次兄に、この喜八の話をしました。「そいつ、新鹿の奴やろ。おれと同級の奴や」

兄の話でわかったことは、喜八は兄の親友の友達で、今年まで熊野市のとなりの有馬という所にある私立工専に行っていたが大学進学を考え、三年でやめて、私達と同じ木本高校に入学したこと、父親がタンカーの火災で黒こげになって死んだことなどでした。

私は喜八に対しての偏見を捨てました。そんなある日、私が学校に行くと「お前、仲之の弟やて。おれはお前とこの兄貴をよう知っとるんやじょ」と話しかけてきたのです。そして喜八から聞いたことは、二年生の大田という番長グループが私に目をつけているので気をつけたほうがいいということでした。私は、別にケンカをしに高校へ入ったんじゃないと思います、さほど気にしていませんでした。

ところが、それから幾日かたったある日、体育の時間が終わって教室に帰る途中、一年の商業科の男に足をかけられたのです。私はびっくりかえり、カッときてニラミすえました。「何じゃ、その目は。文句があるなら相手になつたぞ」そう言って私をとりまいた中に、二年の大田がまじっているのです。

その時、「お前らやめとけ、稲田には、おれから話しく」と言う言っでとめてくれたのが喜八でした。この喜八は、空手をやっているといううわさがあり、三年生もさんづけで呼んでいました。「稲田、腹が立っても相手になるな、あいつらは、人数が多いでな」しかし私は、腹が立ちました。『ムチャクチャやないか』

高校に入学して十日もたとうかという頃、私は一人の女子に注意を向けるようになりました。どの教科ということはなしに先生が私を指名することに笑う、色が白く背の高いきれいな女子でした。それに、昼食時間になるときまって私の四、五人前の机に私の方を向いてすわり、弁当を食べるのです。

ところがそんな日が続いたある日、田中という男が、クラスの生徒全員に聞こえるよう